

Conversations dans la classe の ニュースレター

Alma - Groupe de recherche en pédagogie des langues
Édition japonaise de « La Lettre de Conversations dans la classe »

6 - 2002 年 11 月

目次

Informations

Édito	1
第 2 回 イミディアット・アプローチ研究会 瓜生濃世	2
イミディアット・アプローチの授業公開・見学 (オープンクラス・カレンダー)	2

Entretiens

イミディアット・アプローチについての実践報告 水野いずみさん	4
フランス語圏教師と日本人教師によるコラボレーション カミムラ・タン・フォンさん	6
語学学校におけるイミディアット・アプローチ フィリップ・ブラシェさん	7

Méthodologie(s)

学習者レベルが多様なクラス・大人数クラス ジャン＝リュック アズラ	8
4 人の生徒による会話テストの試み ブリュノ・ヴァニウヴェンヌイヌイ	9
「話しことばの文法」について: ルイ・ブノワ	11

イミディアット・アプローチについて、 もっと知りたい方には	12
--	----

Cette Lettre existe aussi en français !
Pour vous la procurer, contactez-nous.

アルマ言語教育研究会

Alma - Groupe de recherche en pédagogie des langues
www.almalang.com

Comment nous contacter ?

Par e-mail : info@almalang.com
 Par téléphone : 075-753-6675
 Par courrier : 602-0867 京都市上京区寺町
 通荒神口下松蔭町 140-1
 140-1 Matsukage-cho Kojinguchi-
 sagaru Teramachi-dori Kamigyoku
 Kyoto-shi 602-0867



現在私たちが取り組んでいるのは、以前出版した *Conversations dans la classe* の改訂版です。改訂版は「基礎編」と「応用編」の2冊に分かれており、2003年の新学期に合わせて刊行する予定です。変更したポイントに関しましては、今号掲載の「改訂版の改良点について」(p.4)をご覧ください。また、この *la Lettre* の真ん中に、教科書の構成を示した冊子がありますので、そちらも合わせてご参照ください。

さて、9月21日、22日両日に大阪大学で開かれた *La Méthode immédiate* (イミディアット・アプローチ) 秋季研究会は、参加者の方々と、このメソッドの体験談を披露していただいた教員の熱意のおかげで、大変実り多いものとなりました(p.2の瓜生濃世による報告を参照)。特に、今回初めてフランス語とドイツ語の教員による、日本語でのワークショップを実施したのですが、両教員は、授業で行ったテストの様態を録画したビデオを用い、見事にその成果を示してくれました。

このワークショップで交わされた様々な議論(非常に活発なものでした)は、イミディアット・アプローチというメソッドの運用に関する側面と、理念的な側面とのふたつの視点から交わされることによって、しだいに本当の深みが出てきたように思われました。私たちは、こうした語学教員が集う場をもうけ、共通の語学教育法について議論することの利点を改めて実感しました。

今回のニュースレターには、語学教育について考察した3本の論文と、3つの対談が掲載されています(フランス語ネイティブの教員と日本人教員のペアによる授業、語学学校におけるイミディアット・アプローチの実践、日本人教員によるイミディアット・アプローチの最初の試み)。これらの対談には、私たちにとって特に興味深い側面がいくつも登場します。また、次号(2003年発行予定)では、あなたの寄稿を心よりお待ちしております!

語学学校でのイミディアット・アプローチ

学生が大学を終えても、フランス語会話の練習が継続できるようになっています。La Méthode immédiate は、現在日本各地の多くのフランス語学学校で使用されています。使用校の一覧表をご希望の方は、Espace France (tel / fax 06-6534-1002) までご連絡ください。

もしイミディアット・アプローチを利用している学校をご存知でしたら、当方のリストをより正確なものにするために、ぜひご一報ください。infos@almalang.com (Tel / fax 06-6534-1002)

Informations

第2回 イミディアット・アプローチ研究会

去る9月21・22日、大阪大学にてイミディアット・アプローチ研究会が開かれました。プログラムの内容は、模擬授業あり、実践報告あり、そしてディスカッションや教材作りなど多岐に渡るものであり、イミディアット・アプローチを様々な角度から理解できるよう構成されたものでした。

最初のプログラムは、参加者自身が生徒役となり、ベトナム語の会話シートを使用して、イミディアット・アプローチを体験するというもので、外国語を初めて習う時の不安、その中でのイミディアット・アプローチ式授業・教材の有効性、そして楽しさを実感できる場となりました。続く複数の教員たちによる実践報告では、大学や高校、専門学校といった異なる教育現場におけるイミディアット・アプローチを用いた授業が紹介されました。授業風景や口頭テストの様態を録画したビデオも上映され、会話力の養成を重要な目的とするイミディアット・アプローチの成果が目に見える形で確認されました。ビデオで映し出されたフランス語会話を行う生徒たちの生き生きとした表情に感心した参加者も多かったようです。そして、クラス状況に応じたイミディアット・アプローチの様々な導入の仕方については、熱心な質問が相次ぎました。その他にもCD-ROMの教材開発についての報告や、参加者全員による会話シート作成等があり、これら全プログラムを通じてイミディアット・アプローチの利点とその問題点が論じられ、今回の研究会で初めてこの語学教育法を知った参加者も、その目的や具体的な実践方法、そして教材について十分な理解を得ることができたと思われまます。



全体的な印象として、同じフランス語教員であっても、様々な場所で教鞭をとる日本人・フランス人が集まったこと、またフランス語だけでなくドイツ語など様々な外国語教員が集まるなど参加者の顔ぶれが多彩であったことから、イミディアット・アプローチに対して、それぞれの視点を生かした意見が活発に交わされたということが挙げられます。そして、授業での実践における具体的な注意点から、語学教育に関する一般的な問題まで話題が尽きることはなく、二日間、気軽ながらも、適度な緊張感のある雰囲気の中、参加者全員が熱意を持っ

てイミディアット・アプローチを学ぶことができたと言えるでしょう。そして何よりも、メソッドの一方的な紹介ではなく、聞く側の意見や質問が、常に求められたという全体のスタイルにも参加者が満足感を得られた理由があるように思われます。今後も、こうしたプログラムの開催を通じて、イミディアット・アプローチのさらなる可能性の追求と知名度向上が望まれます。
(瓜生濃世)



オープンクラス・カレンダー

**イミディアット・アプローチの授業を
公開しませんか！？**

**イミディアット・アプローチの授業が
見学できます！！**

イミディアット・アプローチにご興味のある方、他の先生の授業を見学したいという方のために、授業を公開している先生方がいらっしゃいます。オープン・クラスの先生方とクラスのリストおよび連絡先は、イミディアット・アプローチのインターネット・サイトをご覧ください(www.almalang.com)。

現在、仙台、東京、横浜、静岡、大阪、京都、神戸、松山、そして福岡のフランス語の先生方が、見学者の受け入れをしており、その数は更に増えています。

**既にイミディアット・アプローチを
実践なさっている先生方へ：**

ご授業を公開なさいませんか？

同業者である別の先生を授業に招くことは、授業を他の視点から見られ、現場を知る者同士で話せる、非常に貴重な機会です。また、見学の先生とフランス語で会話をするという貴重な機会を、生徒に提供することもできます。

「完璧なお手本」を示す必要は全くありません。大切なのは、それぞれの個人的な体験や、喜びや苦労を分かち合ったり、有益な意見を交換したり、フィードバックを得たりすることです。

見学の依頼が殺到するようなことはありません。そんなに簡単に時間の都合や地理的条件がうまく合うものでもありませんから。



先生のお名前	
授業見学申込み用の連絡先	E-mail : 電話 : (連絡のつく時間帯や曜日等 :)

	曜日・時間	教育機関	学校名	都市名	授業の構成要素	学年(大学、高校等)	学生数	あればコメント等
例	木曜 14:50-16:20	大学	関西学院大学	西宮 (神戸の近く)	専攻ではない、 初級程度	各学年	12	クラスの 雰囲気はよく、 レベルは多様
クラス 1								
クラス 2								
クラス 3								
クラス 4								
クラス 5								

→ この趣旨に賛同し、ご授業を公開していただけます場合、上記の申込用紙に記入して、FAX でお送り下さい (FAX: 092-642-4475)。または、申込用紙の内容を、E-mail でお送り下さい (E-mail: vannieu@almalang.com)。

イミディアット・アプローチの授業が、どう運営されているかを見てみたいという先生方へ：

ぜひ、サイト (www.almalang.com) のオープン・クラスのスケジュール表に載っている先生に連絡を取って、その先生の授業を見学し、参加してみてください。イミディアット・アプローチの原則はとても簡単なことですが、「百聞は一見にしかず」です。私たち教師の多くにとって、今まで長い間身に付いていた習慣や思いこみ（「授業時間中、半分以上は自分が話していないと、仕事をさぼっている気がしてしまう」、「生徒たちにフランス語に関心を持たせるよう仕向けなくては行けない」など）さえ、くつがえされるかもしれません。活気ある授業をご覧ください。

これからの“La Lettre”は、日本語版とフランス語版!!

今後“La Lettre”は、完全日本語版と完全フランス語版の2種類を発行して行きます。ご希望の版をぜひお知らせください。お知り合いの先生方にご紹介するなど、複数冊ご希望の場合も、ご遠慮なくお知らせください。

ドイツ語教科書

イミディアット・アプローチに即したドイツ語教科書が誕生しました！ 題名は“Gespräche im Unterricht”、69 頁、1800 円 (CD はなし)。販売元：伸興通商 (tel: 03-3353-1751, fax: 03-3353-2205)

Lektion 23: Was hast du in den Sommerferien vor?
第 23 課 夏休みの予定は？

Was hast du in den Sommerferien vor?
Ich habe vor, zu meinen Eltern zu fahren.
Was machst du in den Sommerferien?
Ich werde in Toyonaka bleiben.
Das wird wahrscheinlich anspruchsvoll, nicht wahr?
Ja, das kann sein.

Was machst du sonst noch in den Sommerferien?
Ich habe nichts Besonderes.
Ich habe sonst (mehr) arbeiten lernen.
Danach muss ich eine Arbeit schreiben.
Ich werde zu Hause bleiben.
Ich habe vor, irgendwohin nach (zum) zu fahren.
für ein paar Tage für eine Woche für zwei Wochen in dort zu bleiben.

Dialog 会話
Das wird wahrscheinlich anspruchsvoll, nicht wahr? Das kann sein.

1. A: Was hast du in den Sommerferien vor?
B: _____ Und du?
Was hast du vor?
A: _____

2. A: Hast du vor, in den Ferien zu arbeiten?
B: _____
3. A: Musst du in den Ferien lernen?
B: _____

Entretiens

Méthode Immédiate を実際の授業の中で どのように取り入れているか ということについて の実践報告

(水野いずみ 同志社大学・同志社女子大学非常勤講師)

今年度、1クラス20名程度のフランス語の授業の中でこのメソッドを用いてみました。

Q: どうしてこのメソッドを取り入れようと思いましたか？

A: 10年前からネイティブの先生と協力して会話の指導を行ってきました。良い教材を用いて、ネイティブの先生とも連携をとりながら授業を進めて行くのですが、学生がなかなか自分の言いたいことを表現できるようにならないという悩みを抱えていました。そこで、今年度、このメソッドを取り入れてみることにしたのです。この方法だと学生はすぐにフランス語が話せるようになります。授業の初日から学生達がフランス語をしゃべることができるというのはある意味で驚きでした。

Q: このメソッドを取り入れてみてどうでしたか？

A: この方法を用いるのは初めてだったので、多少の不安はありましたが、実際に用いてみると、さほど難しくはありませんでした。まず最初は、その日に学んだ表現をすぐに用いて実際に会話してみるということから始めてみました。教師の側がコミュニケーションな学習活動を実践することに慣れていなくても、この方法を授業の中に取り入れることによって、活発で生き生きとした授業を実現することができます。学生にとっても、このメソッドの中で提案されている様々な学習活動を実際にやってみることは、私たちが想像するほど困難ではなかったようです。むしろ友達や先生とフランス語で話すことを楽しんでいるようでした。

Q: どのような学習活動を行いましたか？

A: 以下の4つのタイプの学習活動を行いました。

1. 1人または2人以上の学生とインタビュー形式で会話をするという活動。この最初の段階では、私が学生に質問し、会話を進めていくというかたちを取りました。

2. あらかじめ学生同士が一緒に準備をした上で、教師の前で、二人で対話するという活動。

3. 複数の学生が、輪になって着席し、上記の活動を通じて学んだ様々な表現を用いて、自由にディスカッションするという活動。

4. 質問用紙を配布し、学生同士がお互いにフランス語で

質問をし、その答えをこの用紙に記入していくという活動。

これらの活動において、学生同士がお互いにフランス語で質問することで、その自主的な学習が促進されたように思われます。教師は、発音や表現を訂正したりするなど、学生に必要な援助を与えました。

Q: 難しく感じたこと、
あるいは、うまくいったことは何ですか？

A: インタビュー形式のテストの途中で沈黙状態になると、やはり困りました。このような事態をさけるためには、会話中には黙り込んではいけないということを予告した上で、「Je ne sais pas. わかりません」、「Encore une fois, sil vous plaît. もう一度言って下さい」などのメタ・コミュニケーションの表現を、あらかじめ使えるようにしておく必要があります。

良かった点は、このような自主的な学習形式を学生たちが喜んでくれたことです。彼らは、グループでの活動に進んで参加し、教師がテストを行っている間も、他の学生は、雑談などせず、テストの準備をしていました。学生の授業に対する真剣な態度に感銘を受けました（今まで一斉授業をやっていた時は、様々な問題があったのですが）。

Q: 次はどんなことをやってみたいですか？
(新しいタイプのテストなど)

A: 2002年秋のMéthode Immédiate研究会において、授業における様々な学習活動の実践についての報告を行いました。その際、討論の中で、次のような点が問題になりました。

1. エラーについて。学生の会話の中に多くの間違いが見出されるのは事実です。エラーをするたびに、それを修正していると、最後には、必ず正しいフランス語が話せるようになります。最初は失敗するのはあたりまえですが、それを恐れていては上達はありませぬ。間違いに注目することよりも、一生懸命表現しようとしていることを認めることの方が大切なのではないでしょうか？たとえたどしくても、何か興味深いことを話そうとしているならば、その努力を評価することが必要だと思います。

2. 文章の自然なつながりについて。自然な会話の流れをつくるために、「Moi」、「Moi aussi」、「Moi non plus」、「Et」などの言葉を、文頭に入れる必要があります。これらの表現を用いて、会話の流れをより自然なものとする努力を今後は推奨していきたいと思っています。

3. 日本人学習者の受動的な学習態度について。質問されたことには答えられるにもかかわらず、自分の方から誰かに質問するのは苦手です。このような態度を改善するために、簡単な質問「Et vous?」を用いて教師に質問を返す方法を用いることから始めます。さらに、もっとラディカルな方法として、テストの際に、学習者が教師に必ずいくつか質問するという義務を課すこともできます。このような方法も今後試してみたいと思っています。

Q: 日本人教師がこのメソッドを用いることの意義はどこにありますか？

A: 日本人教師も、会話や実習(Travaux Pratiques)の授業において、単独でこのメソッドを用いることができます。あるいは、ネイティブの教師とチーム・ティーチングの体制で連携を取り、この方法を実践することも可能です。その際には、

文法をどのように教えるかという点について熟考する必要があります。教師間の適切な連携が実現することによって、より楽しく、喜びを持って外国語を学ぶことができる学習環境を学習者に提供することができるのではないのでしょうか？

ネイティブ・フランス語教師と 日本人教師によるコラボレーション

Entretien avec Thanh-Huong Kamimura
(上村 タン・ウォング氏 ・青山学院大学)

Q: イミディアット・アプローチを日本人の先生と協力して取り入れていらっしゃるんですね。お二人のコラボレーションはどのように運営されているのですか？

A: 私は、経済学部と国際政治学部の、フランス語を専攻していない学生のクラスを2つ持っていて、それに *Conversations dans la Classe* を2002年の4月から取り入れています。

1年生の学生は全くの初心者です。1週間に90分のフランス語の授業が2回あり、それを私ともう一人の日本人の教師で分けて担当しています。今年は23人の学生が登録しました。どちらの授業でも *Conversations dans la Classe* を使っています。

2年生からは、日本人教師による授業は必修ですが、フランス語教師による授業は選択制になります。今、私のクラスは12人の学生が選択しており、*Conversations dans la Classe* を使っています。日本人教師の方は、フランス語履修者全員に、従来の教科書で教えています。

新学期前に、私たちは仕事を2人で分担することにしました。日本人教師は、語彙や表現の説明、会話シートに出てくる文法のポイントを示したり、書くこと(つまり練習問題中心)に重点をおいて教えています。今年は彼の授業が私より先に始まったおかげで、テクニカルな面で十分に準備した上で学生たちは私の授業に臨むことができました。

Q: 普段、カミムラさんの授業はどのように進行しているのでしょうか？

A: 学生が教室に入ると、既にオーラルを始める準備ができています。私の1時間半の授業構成はだいたい次のようになっています。

前回及び場合によっては前々回扱ったレッスンについての復習を10分間。

「授業」を25分間。質問や返答に、使える限りのあらゆる言い回しや表現を使います。学生の要望に応じて、新しい語彙をリストに付け加えたりもします。この過程でクラスは非常ににぎやかになり、いつも「は何と云うのですか?」、「はどういう意味ですか?」、「はどう発音すればいいの

ですか?」などと言った質問がたくさん出てきます。

ペアを組んだり、3、4人のグループで会話の練習を25分間。この間、私は教室をまわって、個別に補足説明をしたり、間違いや発音を直したりします。

テストを30分間。個別に、ペアで、あるいは3人で組んで行います。相手は自由に選んでもらいますが、一緒に組んだ人と、点数は必ずしも同じにはなりません。

2年生には、日本人教師が私の授業に来る学生たちのために、語彙や文法説明をする時間を取ってくれました。2年生の学生たちにはシートAそして、シートBを使っています。更に会話を補助するために、教員用ガイドに載っている、あまり難しくない書き取りのテキストを配っています。そのテキストの内容が日本とフランスにおける生活を比較したものが多く、学生たちも非常に喜んでいました。

Q: 1学期が終わって、どのような印象を持ちましたか？

A: まず何より、同僚の日本人教師、東松秀雄先生には非常に感謝しています。先生の全面的な協力のおかげで、明らかな成果が得られたと言えると思います。

きちんと準備ができた状態でテストを受けることで、複数の学生、出来のいい学生まで含めて、自信をつけることができました。

授業は非常に活気があり、強制もなく、各自のペースに合わせたものなので、学生の欠席もほとんどありませんでした。自信がなかったり、引っ込み思案の学生であっても、この授業に意義を見だしています。テスト中、練習している間に、出来の良い学生に、あまり出来のよくない学生の面倒を見てもらっているのですが、日本人の間ではそのことのためにためらいもあまりないようで、感心しています。

雰囲気は非常によく、学生たちは自然に仲を深めています。

何より私にとって嬉しいのは、授業が始まる前から、学生たちが会話の練習をしているのを見られたことです。何人かの学生が早々とクラスに来て、フランス語での会話を楽しんでいるのを見かけたんです。

Q: 大変なことは？

A: 授業の進行のタイミングにやや苦労しました。同僚によって一部、授業の準備を整えてもらっていたのにもかかわらず、テストで常に遅れをとってしまっていました。

Q: 最後に、簡単に今のご感想をお願いします。

A: イミディアット・アプローチは私が今までずっと学生たちに教えたいと思ってきた授業を実践するのに、最も的確な方法でした。あらゆるレベルの学生たちに、フランス語による会話をとっつきやすいものとし、日本人学生にありがちな受け身や恥ずかしいと言った姿勢を崩すことができたのです。目的を達成でき、本当に満足しています。

語学学校における イミディアット・アプローチ

Entretien avec Philippe Brachet
フィリップ・ブラシェ氏へのインタビュー

ブラシェ氏は仙台のアリانس・フランセーズ、山形芸術工科大学、またその他仙台の多くの語学学校で教鞭を執っている。ブリュノ・ヴァニューヴェンヌイズ(以下、筆者)が e-mail で彼にいくつかの質問をした。

Bruno : イミディアット・アプローチは当初、大学向けの教授法として想定されていましたが、ブラシェさんは数々の語学学校や文化センターでこれを取り入れていますね。どのような感じですか？

Philippe : うまくいっています。文化センターの受講生は「客」であり、受講料を払うことが何よりのやる気につながっています。自発的にクラスに来て、たいていフランス人による授業を希望しています。だから、生徒に会話中心を進めることを理解してもらうのは容易です。第一回目の授業から、私は授業の特色を次のように説明しています(日本語で)。

「私も早くみなさんと、フランス語で会話ができるようになりたいと思っています。もちろん作文や、書き取り、文法も重要ですが、1週間にたった1時間半の授業では全てを網羅することはなかなかできません。だから、会話を中心にクラスを進めていきましょう」

そうすると、生徒の表情がぱっと輝いて、ホッとした笑顔になります。その安心した表情から、「やった、動詞の活用で四苦八苦せずに済むんだ！」と言いたそうな感じが見て取れます。

文化センターの受講生というのは、専門性を求めてはいません。学生とは違って、社会に出て、あらゆる拘束にさらされています。その上、勉強する習慣もなくなってしまい、またその時間ありません。だから、最初の授業で示す、もう一つの指針は次のことです。

「勉強する必要はありません、読めばいいのです。ただ、読んでください。できれば一日一回、クラスで習った会話を読んでください。フランス語になじんでもらえればいいのです。」

そして、毎日、カフェや電車の中、あるいはお風呂の中などで会話文を読む努力をしている受講生は、すぐに、私との実際の会話でも何分間も続けてすることができるようになります。

Conversations dans la Classe は、授業で会話をする枠組みをもたらします。旅行者用の、決まり切ったフレーズのような、堅い枠組みではありません。*Conversations dans la Classe* は、受講者があらゆる会話表現に対応できるように、柔軟な枠組みを提供しているのです。

Bruno : 具体的な例はありますか？

Philippe : この4月に受講を始めた女性の生徒が、ツアー旅行でフランスに行きました。ツアーですからフランス語を使う必要はありません。何か会話をする機会があったとしても、英語を使うことになってしまいます。現地の人は、観光業のプロ(ホテル支配人や受付、ガイドなど)が相手なので。彼女は、覚えたフランス語をどうにか使おうと思って、バスの運転手を引き込むことにしました。

1日目、レッスン 1A: バスに乗る時に、「こんにちは、お元気ですか？ 私はサチコと言います。日本人です。あなたは？」

2日目、レッスン 2A, 3A: 「お子さんはいらっしゃいますか？」

3日目、レッスン 4A: 「私は仙台に住んでいます。あなたは、どちらにお住まいですか？」

4日目、レッスン 5A: 「パリからジヴェルニーまでバスでのくらいかかりますか？」

5日目、レッスン 6A: またバスに乗りこむ時に、少しとまどい気味に「今日は、何曜日ですか？」

6日目、レッスン 7A: 「私はテニスをしています。あなたは、スポーツは何をしていますか？」

バスの運転手はその会話ゲームを楽しみ、彼女の質問に快く答えてくれ、時には彼女の発音を直したりしてくれました。写真にも撮られ、すっかりサチコさんのペースに引き込まれたみたいです。彼女は、とても満足して帰りました。この経験を、写真を見せながらクラスでも話してくれました。そして他の生徒も皆、思いました。できるんだ！今は非常にモチベーションの高いクラスになっていますよ。

語学学校や文化センターでは、
『会話テスト』は、『会話の時間』
に置き換えられています。
これはクラスが最も盛り上がる
時です。

Bruno : 大学では「会話テスト」は2つの役割を持っています。一つ目は、オーラルの実践に大切な機会を与えるため、授業に不可欠な構成要素であるということです。もう一つは、授業に対するやる気や目標を与え、洗練された、かつ効果的な方法で学習者つまり大学生にモチベーションを与えるということです。語学学校においてはいかがですか？

Philippe : ここでは「会話テスト」は、「会話の時間」に代えています。その日のレッスンを終えたあと、2人一組、あるいは数人のグループで、習った会話の構造を応用し、お互いに練習します。私は教室内をまわり、クラス全員の前では発言しづらかった質問に答えたり、発音を直したり、時には会話に参加したりもします。これは教壇から降りて、生徒たちの間

に溶け込み、クラスのまとまりやきずなを作れる、楽しいひとときです。このグループ会話をねばり強く、根気よく続けることが、継続のために欠かせないキーポイントであり、最も重要な要素と言えます。初心者向けクラスで挫折した生徒でも、後になって、このグループに参加するようになります。

「会話の時間」は、本当に学習者に自信をつけさせますね。

練習をした後、生徒によっては思い切って、私との会話の「海」に飛び込むこともあります。足もつかず、一対一で、他の生徒とは離れたところで、浮き袋もありません。練習ノートは鞆の中ですから。そこで、生徒は自分の努力の成果や、ゆとり、今まで来た道のりを確認することができるのです。大学のように、成績による評価はありませんが、喜びが感じられます。フランス語という、自分の母国語以外の言葉、難しいことで有名な言葉、そして同じ日本人でできる人があまりいない言葉で、会話することの満足感が得られます。先生と会話することの喜び、幸せ、そう、フランス語で理解し、理解されることの幸福感があるんです。

「会話の時間」は、喜びのひとつであり、またそうでなくてはいいけません。実際、クラスが最も盛り上がる時です。

Bruno : 私も、イミディアット・アプローチを、大学以外の教育現場で数年前に実践したことがあります。NHKの文化センターでした。実を言うと、当時私は、生徒と個別に会話をする時間を定期的に設けることは考えていませんでした。大学で行っていた「テスト」という概念にこだわっていたのです。今、また語学学校で再び授業をする機会があれば、私もきっとブラシェさんのようにしますよ。実は、大学で、語学学校に非常によく似たクラスがあるんです。学生のモチベーションも高く、レベルにはばらつきのある少人数のクラスです。イミディアット・アプローチを使った1年目は、クラスの出来があまりにいいので、テストをする必要もない、と思いました。グループでオーラルの実践を行い、学生は、クラス全員の前でも積極的に、お互いに質問をし、あるいは私に質問をしたり、私の問いに返答していました。しかしある時、やはり何か足りないと感じて、会話テストを再び取り入れることにしたのです。実際それは、ただのペアを組んでの会話や、グループによるオーラルの実践とは異なった、言語活動と言えます。

更にもう一段階進めることもできます。日本人は試験などの客観的評価を求めますから、文化センターのようなところでも「会話の時間」をもとに、点数をつけたり、何かしら評価をすると良いと思いませんか？

Philippe : それは全く考えたことはありませんでした。どうなのでしょう？

Bruno : 試しにやってみてもいいかもしれません。成績表のように簡単に一枚の紙に点数の合計をまとめて、学期末に渡すなど。生徒によっては、各テストのレベルごとに、自分の成果に対する細かいフィードバックがあると、嬉しいかも知れません。ごく単純な評価（非常に良い・良い、あるいはA・B、など）にするか、10点満点の点数制にするかは、生徒に選ばせてもいいわけです。もちろん、学校によって、生徒自身が成績を付けて欲しいかどうか選んでもらいます。単に私としては、何となく、こうすることで生徒の何人かはモチベーションを高めることができるのではないかと思います。やってみない

分かりません。でも、ブラシェさんのクラスは、そんなことをしなくてもうまくいっているようですし、これはあらゆる方法の一つを想定してみただけのことですが。

この *La Lettre* の読者に対して、ご自分の語学学校での体験について他に何か伝えたいことはありますか？

Philippe : あらゆる会話の機会は、それを踏み台として、フランス文化講座へ進むきっかけになると思います。

レッスン9で、生徒たちが最も好きな映画は『グラン・ブルー』でした。課題は、「来週までにこの映画を見てくること」。翌週、生徒たちは映画についてそれぞれの印象を語りました。ジャン・レノやイルカなどが良かったという人、空気をめいっぱい吸って気絶した日本人ダイバーの登場や、最後に心優しい主人公が消えてしまうことなどが良くなかったという人。ほとんどの生徒たちは、フランス映画に対して知りたいこと、聞きたいことが山とあるんです。不意に始まったかと思うと、突然終わってしまうような、フランス映画について。もちろん、こういったフランス文化講座は日本語で行われます。でも私は、それまでに習った言い回しが出てくるシーンをいくつか映画の中から取り上げます。例えば、この作品の最初に、子供時代のジャックが「それを見た」と言うシーンがあります。ちょうど、レッスン9で扱った動詞です。このセリフで代名詞についての説明もできます。

また別の例で言うと、レッスン1Bでは「それはどのように書きますか」をやりました。そこで、私は黒田清輝の作品をコピーして配りました。生徒たちはみな、なんでフランス語の教師が、日本人の芸術作品など見せるのか疑問に思ったことでしょう。そこで私は、よく注意して、彼のサインを見るように言いました。「KOURODA SÉIKI」!

« ou » という音や、アクセント、トレマ、全部入っているんです。この画家はかつてフランスに住んでいました。こうした背景説明を終えると、生徒たちはたいてい、絵画について話をしたがります。

現在のやり方ではイミディアット・アプローチは、文化面での教育に欠けていることから、語学学校にうってつけとは言いきれません。また、会話の内容によっては、社会人の学生にとってあまり使い道がなかったりもします。（「何歳で結婚したいですか?」、「将来、何をしたいですか?」など）とは言え、語学学校にうってつけの完璧な教授法などありません。多くの受講者が最初にやる気がありすぎて、複雑な文法の細かさにこだわってしまい、意欲もやる気もなくなってしまいがちです。

その反面、イミディアット・アプローチは簡単ですぐに効果も得られます。受講者は、活用や語尾変化で戸惑うこともありません。物怖じしない生徒は、自ら、数々のレッスンで習った表現を組み合わせたたりして、それまでに扱ったことのないテーマについても、長い会話を続けることができます。あまり自信のない生徒でも、会話のテーマや例を提示されることで安心し、落ち着いて取り組むことができます。

こうして新学期ごとに、ほとんどの生徒は文化センターでの受講を更新してくれていますよ!

Méthodologie(s)

こんな現場では、どうする？

典型的な「困難な現場」

学習者レベルが多様なクラスと

大人数クラスの場合

ジャン＝リュック アズラ

「理想的」な教育環境は、モチベーションが高く、レベルも均一で、最高 15～20 人までの学習者で構成されているクラスだとよく言われるが、実際の現場の状況は多様である。60 人もの極端な大人数クラスもあれば、学習者のレベルが非常に多様なクラスもある。大人数クラスでは、大抵学習者レベルも多様である。まったくの初学者と、既に自分の思考内容をある程度表現できる学習者が混在することもある。

イミディアット・アプローチは、そもそもフランス語を専門としない学習者で構成される大人数クラスでの会話教育の問題点に込めるべく考案されたものである（「1995 年から 2002 年にかけての大阪大学における Methode Immediate の展開」：<http://www.almalang.com/azradevelopjapo.html> 参照）。しかし、それ以外の現場にも応用することができる。

学習者レベルが多様なクラスの運営について

筆者は、九州大学で学習者数 8～10 人（毎回全員が出席するわけではない）のクラスを担当している。学習者のうち 2 人は一年以上のフランス滞在学习経験があり、非常によくフランス語が話せ、2 人はまったくの初心者、残りは全員 1～2 年生レベルである。

こうした状況で、中間のレベルに合わせて授業を行うと、

- 上級者は退屈する：簡単すぎるため
- 初学者は退屈する（あるいはパニックに陥る）：まったく理解できないため
- 他の学習者は不安になる：違和感を感じるため

以上の問題に対応するためには、「中間」のレベルを基準にするのではなく、上から下までの様々なレベルに対応し、学習者各自が自分のレベルに応じて学べる素材を提供することが必要となる。

この素材として、筆者は *Conversation dans la classe* の新版「基礎編」の会話シートを使用している。この会話シート

は、初級対象に作られており、学習者は殆ど一人でこれを用いて学べるようになっている。授業では、まず、このシートの内容を全員でさっと確認する。その際、筆者は補足事項を板書し、上レベルの学習者と「その場で」それについて口頭でやりとりをする。この会話によって、更に補足すべきアイデアを得ることもある。

以上のやりとりによって、上級者は教師と会話をする機会と、会話能力を上達させる機会を得られ、授業に出席する意味を見出す。一方、初級の学習者は、その間、シートの理解に努め、会話テストの準備をする。中間のレベルの学習者は、その時々素材のレベルと自分のレベルに相談しながら、どちらの活動も自分の選択で自由に行える。筆者は、彼らとも「その場で」色々なやりとりをする。

最も重要な留意点は、「教師は自分たちのことなど構いたくないのだ」という印象を初級の学習者に与えないようにすることである。

この問題を解決するため、筆者は、内容を簡単に抑えた会話テストを時間をかけて行っている。綿密に会話シートの内容に沿って会話をして行くことで、学習者は準備をすれば会話ができることを理解すると共に、会話の実現によって達成感を得る。

	レベル	「その場で」のやりとりにかける時間	一回の会話テストにかかる時間 (40 分中)
Ayumi	ほぼ流暢	10 分	3 分
Ken	ほぼ流暢	10 分	3 分
Hitomi	非常に流暢	5 分	5 分
Kotaro	中間	5 分	5 分
Mika	初級	1 分	5～10 分
Hiroto	初級	1 分	5～10 分

大人数クラスの運営について

筆者は、大阪大学勤務当時、最高で 69 人の大人数クラスを担当していた。学習者は工学系の学部生であり、フランス語にはさほど関心がないようであった。

このような状況の問題点は以下の通りである。会話テストを一回の授業あたり 30～40 分行うことにすると（それ以外の時間は会話シートの内容について説明したり、全体で確認する）、学習者一人当たり一学期のテスト回数は 2～3 回に限られ、年間で一人当たり 12～15 分しか会話できないことになる。

そこで筆者は、会話シートの内容について説明したり、全体で確認する時間を 10 分だけにしてみた。この 10 分は、単語の発音の一斉反復練習にあてた。そして、それ以外の時間 70～80 分を「会話のテスト」の時間にあてた。当時、筆者

は会話テストの形態として、教師 1 人对学習者 1 人または教師 1 人对学習者 2 人の会話テストしか行わなかった（つまり、一度に 3 人以上の学習者と会話することはしなかった）が、それでもどの学習者も一学期間に 6 回の会話テストを受けることが出来た（各学習者にとって、授業 2 回あたりほぼ 1 回の会話テストができたことになる）。

この方式の最大の問題点は、授業時間の大半の過ごし方が学習者自身に委ねられているということである。このような状況では、学習者の多くは集中力を失い、退屈したり、無為に過ごしたりしがちで、また、教室内はざわついてしまう。

この問題を解決する一つの方法として、記述式の練習問題を多く与え、会話テストの際にそれを持参させた。筆者がそれを預かり、正誤を確認することまではしなくても、その場で一瞥するだけで課題に取り組んだかどうかは確認できる。課題に取り組んでいない学習者は会話テストを受ける権利を得られないというシステムにしておくと、学習者は無為に過ごさず、課題に取り組むようになる。（会話テストの点と出席点により成績を決定するシステムにしておいたので、会話テストを受けない学習者は単位が取得できないのである。）

さらに、教室内のざわつきを抑えるために、筆者は授業の初めの 20 分間を会話テストにあてた（内容は前の週の会話シート）。授業の初めは、学習動機の低い学習者でも集中力があり、静かに自習できるからである。そして、その後で新しい会話シートを導入し、続いてその分の会話テストを行うようにした。授業終了の 30 分前になると、テストを済ませた学習者やテストを希望しない学習者は退出してもいいということにした。

我ながら非常に驚いたことに、「授業をしない授業」は予想以上に効果的であった。より少人数のクラスでは、クラス全体での説明や確認により多くの時間をあて、会話テストにはこれほどの時間を割かなかつたが、そのクラスで実現した会話のレベルと、大人数クラスの会話レベルの間に大きな差はなかった。発音はやや劣り、使用文型も多少単純であったかもしれないが、全体的に教師も学習者も満足な会話ができたと、学習者は会話テストを受けることを歓迎していた。

結論として以下のようなことが言えるだろう。大人数というわけではないクラスにおいても、クラス全体で会話シートの内容について説明を受け、確認する時間が必ずしも多く必要なのわけではない。時には、学習者に会話シートを配りながら、「今日は自分達でこれを理解してみてください」と言ってみてもいいかも知れない。きっと、結果に驚かれることでしょう。

現在 Christian Pelissero が作成中の CD-Rom は、コンピュータ設置教室で教える際に、記述式練習の課題を与えるためにも使用できます。

4人の生徒による 会話テストの試み

ブリュノ・ヴァニウヴェンヌイズ

今回筆者が最近行った、あるひとつのささやかな実験を紹介したい。

個人的なことだが、普段の授業で行う会話テストに加え、最終の会話テストを学期末に行うことにしている。そこで七月、あるクラスの最終会話テストにおいて、4人の生徒による会話テストを即興で試みた。その時私はやや疲れており、しかもそのクラスはとりわけ難しいクラスであった。（それは京都大学の再履修のクラスで、34人の男子学生と1人の女子学生という構成であった。）私は、彼らにテストを受ける時間を事前にペアごとに登録させており、ペア1組につき5分ずつ割り当てることを考えていた。

だが授業が始まった時、私は「今日は4人グループでテストを行います」と知らせた。（そして、登録したテストの時間に合わせて来た学生たちのために、黒板にもその事を書いたのであった。）

まずは、以下の図に示したように、学生たちを向かい合わせに座らせた。

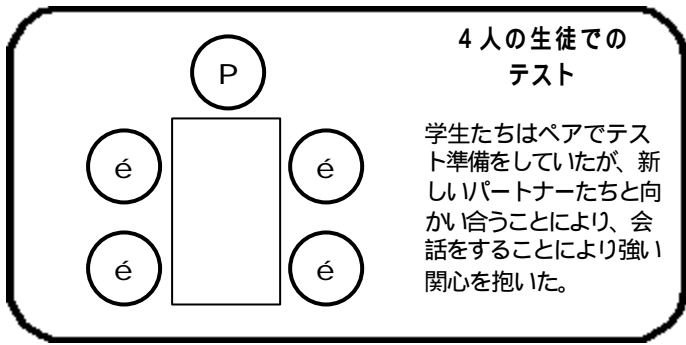
彼らはこのような4人グループになるのが初めてであったこともあり、なかには少し動揺を見せる学生たちもいた。私はただ彼らに「さあ、会話を始めなさい」と言ったのだが、そうすると、彼らはすぐに話し始めたのであった。

変化した点

この試みは、結論を引き出すのに決定的なものであったと思われる。

学生たちは、普段と同じように、それまで行ったテストですでに話した事柄について話し始めた。私は、会話テストにおいて同じ話題について話したり、また同じ質問をしたりすることは全く構わない、ということを繰り返し言うようにしている。大事なことは、それらを必要に応じて (*à propos*) 使うことであるからだ。会話テストは、以前のテストで実践した会話要素の30%から50%を再び使う可能性があるのだが、そうした要素は新たな要素と結びついて変化し、新しい会話の展開のなかに組み込まれていくのである。そしてさらに、今まで一度も情報交換をしたことのない「新鮮な」相手と向き合うと、新たな関心を引き起こすことになるのである。さて、この最終テストの前の授業で扱ったテーマは「夏休みに何をしますか?」であった。そこで最終テストでは、このテーマを中心に会話が進んだ。あるグループでは、ひとりの学生が「家族に会いに実家に帰ります」と言い、他の学生が「あなたの家族はどこに住んでいるの?」と聞いた。そして、実は二人の学生が同じ市の

出身であることがわかったのであった。そこで、「熊本はどこ？」「え、そうなんだ！私の姉がそこに住んでるよ！」などと会話がはずみ、笑い声や驚きの声が生まれた。

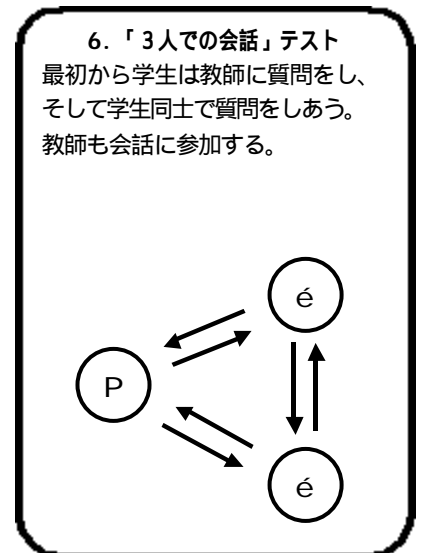
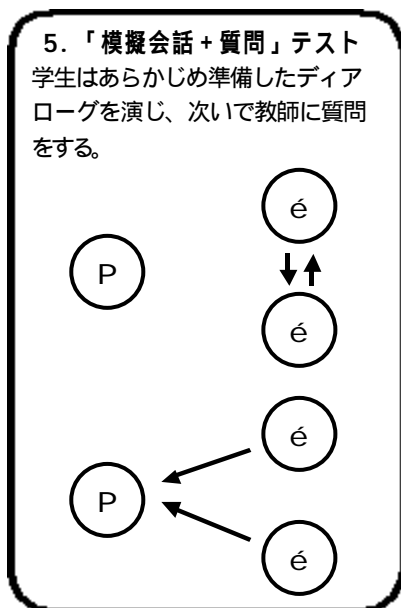
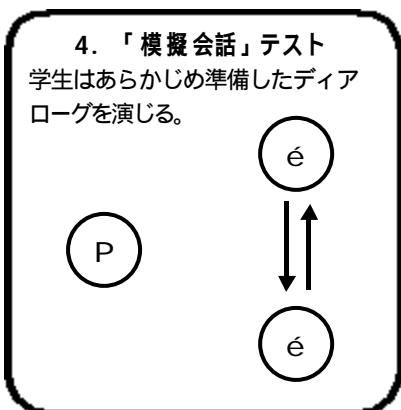
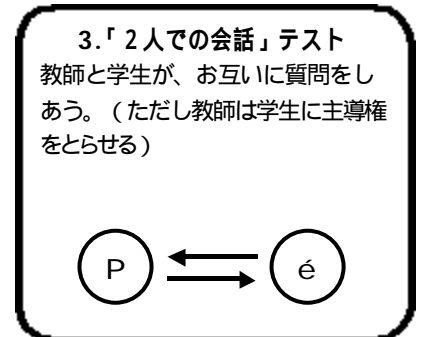
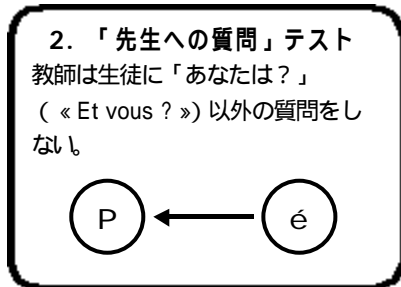
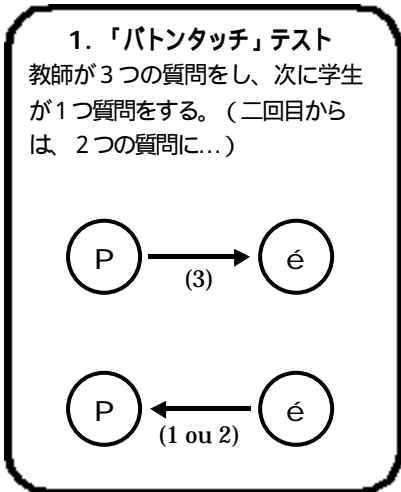


普段から、私は学生たちにメタコミュニケーションの表現を使うことを強く勧めている。学生たちが言葉を忘れた時、彼らはパートナーにそれを尋ねる。例えば「とくになににもないって何て言うんですか？」という風に。もちろん、テストの時は私がいるので、同じような質問を彼らは私にすることもできる。この4人でのテストを実践するにあたり、私は会話にあまり参加せず、むしろ聞き役に徹していたのだが、こうしたメタコミュニケーションのやり取りはたくさんなされていた。学生がわからないことはパートナーが説明し（「それは家に帰りましたという意味です」など）、それは他のグループにおいても同様であった。

教師側にすれば、従来行ってきたような、教師が二人の学生と向き合うタイプのテストに比べ、ゆったりすることができたとえよう。私は沈黙が少し続いた時に（これは稀であったが）会話が再開するよう介入しただけであった。もちろん学生側から質問があればそれに答えることはあったし、会話が興味深い内容になった時、聞きたいと思うことがあれば私からも質問した。その結果、全体的に私は普段ほど前にでることがなく、今回のテスト方法によって少し気を休めることができた。17～18回のテストを行うはずであったのが9回で終わったという事実は、いつもより1回のテスト時間が長かったにしろ、より軽い疲労感で済んだという結果にもなった。イミディアット・アプローチは、教師にとってかなりのエネルギーを要するものである。ゆえに、教師はうまく自分のエネルギーの使い方を考え、またエネルギーを節約できるような時間をつくり出す必要があると言えるだろう。

すでに述べたように、4人でのテストは、1回に必要なテスト時間が2人の場合に比べて長くなる。具体的には、私は各4人グループに10分（2人の場合は5分である）費やし、テスト後にはその出来について意見を述べたり特に注意すべき誤りを指摘したりするのに1分使った。また移動時間に30秒かかることを考慮に入れた。我々はこの移動時間を忘れがちである。この時間は学生が座る、座席に忘れてきた出席表を取りにいづく、などにかかる時間である。

今回行ったタイプのテストには、新たな困難があったのも事実である。この難しさは、2人でのテストにおいてもしばしば見られるものの、それほど顕著ではない。それはすなわち、同じ質問を2回以上繰り返してしまい、繰り返しばかりしてい



る、という印象が生まれてしまう点である。とりわけ注意すべきなのは、「あなたは？」(《Et vous ? 》)という質問の繰り返しである。このフレーズを繰り返すと、変化に乏しく人工的であるような印象を与えてしまうだろう。それを避けるために必要なことは、質問の形式に変化をつけることである。例えば「あなたはどこに住んでいるのですか？」(《Vous habitez où ? 》)を2回使うことに問題はないが、3回目は例えば「あなたは？」(《Et vous ? 》)、「あなたもこの近くに住んでいるのですか？」(《Vous aussi, vous habitez près d'ici ? 》)、あるいは「私は京都に住んでいるんです。」(《Moi, j'habite à Kyoto 》)などという風に言い方を変える必要がある。ひとつの同じ質問をメンバー全員に対して使う必要はないのである。こうした注意点に関して、私はテストの前後に、クラス全員に十分な説明を行うようにしている。その時、私はわかりやすいように口頭で例を挙げて説明を行う。例えば、まず最初の学生に質問をひとつする。そして二番目の学生に「あなたは？」(《Et vous ? 》)と聞く。三番目の学生には、最初の学生にした質問のバリエーションを使い、四番目の学生にはまた別のバリエーションを使う。結果、こうした工夫が、我々が授業の目的としている「自然に流れる」会話をつくりだす、ということを学生が理解できるのである。

テストの形式を変化させる

今や明らかに思われるのは、皆さんがテストの形式を変化させることに対して大いに関心を持っているということであろう。Lettre 第2号(2001年2月発行)において、私の経験上、問題なく行うことができた様々なテストのタイプを提案した。(上の図を参照のこと)

最近ではテストのバリエーションを増やすことを中止し、今年度はまず学生2人でのテスト形式を実践した。その際、学生には最初から彼らの方から教師に質問をすることを要求した。この方法は、私の場合、非常に満足いく結果をもたらすこととなった。どのような結果であるかということ、私は最初の頃、イミディエイト・アプローチを実践するにあたって、わかりやすいステップを必要としていたのだが、そうした時期を越えたということである。それほどイミディエイト・アプローチは私にとって新しいものであった。研究会においても、何人かの参加者が、初期段階においてはわかりやすい指示のみを使用せざるをえないという状況があることを述べていた。確かに、メトイミディエイト・アプローチを実践するにあたって、時に方向を定めるのが難しい時もあるであろう。というのも、我々の今までのやり方の多くを変えなければならないからである。そこで我々は、とりわけ「2人での会話テスト」(上図3を参照)をとりあげ、テストにおいて真の相互的活動にまだ至ったことのない教師や学生にとっての、その長所について紹介した。学生の質問をベースとしてテストを行うことは、彼らにとって会話を始める良いきっかけとなる。(学生だけでなく教師にとっても!)結果、全員が会話の責任が学生側にあることを理解することができる。私に関して言えば、テストの間、学生から何を待っているのか明確であるというビジョンを持つに至り、何が問題であるのかを彼らに理解させるために必要な言葉がわかるようになった。よって私は、もはや口頭での会話における段階的な進展の必要性を感じていない。私はただ、自分

が望んでいるのが興味深い会話であるということを経験して知らせていくのである。その代わりに、私はテストの形式を変化させることを続けたいと考えている。私の授業におけるスタンダードなテスト形式は、生徒2人での会話テストだが、時折「2人での会話テスト」、あるいは生徒4人でのテストなどを提案したいと思う。このように、私は授業においてごく簡単に変化をつくりだしている。こうしたやり方によって、違った刺激(教師にとっても学生と同様に有益である)を生じさせ、再び関心を引き起こすことができるのである。

初期段階を過ぎ、授業をする上で余裕が生まれた時に、イミディエイト・アプローチは、テストや様々な活動(説明、ペアによる練習、共同口頭練習)などのレベルにおいて、様々な種類のバリエーションと実験を実施することを可能にするものである。

Notes sur la grammaire de l'oral

「話しことばの文法」について

ルイ・ブノワ

ルイ・ブノワはイミディエイト・アプローチの基礎となる授業運営法、つまり授業ごとの会話テストや出席表のアイデアを生み出した人物である。彼は、「話しことばの文法」とこれらの方法についてパイオニアとして研究を続けている。昨年の秋季イミディエイト・アプローチ研究会では、教授法の指針となるいくつかの原則の中から2つを選んで紹介してくれた。

原則1: 「話しことば」は「口述された書きことば」ではない。

「話しことばの文法」= 「書きことばの文法」ではない。

話しことばの単位となるのは、書きことばのセンテンスではない。例えば、「Tu habites où ça?」(「どこに住んでいるの?」)という質問に対する答えは「Ici, à Osaka.」(「ここです。大阪です。」)と言うだけでもよい。それこそ、書きことば的な完璧な文章ではない。

同様に話しことばにおいては、否定の《ne...pas...》はあまり用いられず、《pas》だけで済まされることがしばしばある。「Il fait pas très beau aujourd'hui!」(「今日はあまり天気がよくないね!」) - 「Non, il fait pas très beau.」(「うん、あまりよくないね。」)

書きことばの決まりに慣れている我々にとっては、ショッキングな事かもしれないが、動詞の否定形を使った文章で答えなければならないケースも比較的多い。 「Tu es japonais?」(「日本人ですか?」) - 「Non, je suis chinois.」(「いえ、中国人です。」) また、否定はしばしば副詞にかかる。「Bien dormi cette nuit?」(「昨日の晩はよく眠れた?」) - 「Non, pas très bien.」(「ううん、あんまり。」)

原則2：目的は「文法を学ぶこと」ではなく、「自分の言いたいことを言えるようになること」である。

それゆえ、システムティックに活用を教えることが有用であるとは私には思えない。

動詞の形はその時々々の必要性に応じて存在するだけである。例えば、動詞 *manger, rester, aller* を一人称単数で言うところ、「Le soir, qu'est-ce que tu fais?」（「夜、普通どうやって過ごすの?」）「Je mange d'abord; ensuite je reste à la maison ou je vais travailler.」（「まず食事をして、それから家はこいたり、バイトに行ったりします。」）

かくして、「複合過去」というタイトルの会話の授業は私の授業には存在せず、その代わり次のような質問、「Qu'est-ce que tu as fait hier soir?」（「昨日の晩は何をしたの?」）にどのように答えるかを学ぶことを目的にした授業が存在する。この授業は、先に学んだ現在形の会話をただ複合過去に置き換える練習ではない。すなわち「Le soir, qu'est-ce que tu fais?」 「Hier soir, qu'est-ce que tu as fait?」の練習ではなく、「Hier soir, qu'est-ce que tu as fait?」（「昨日の晩は何をしたの?」）- 「J'ai mangé d'abord.」（「まず晩御飯を食べました。」）- 「Ah oui? Tu fais la cuisine?」（「ああそう。自分で料理をするの?」）- 「Non, c'est ma mère; j'habite avec ma famille.」（「いいえ、母が作ります。家族と一緒に住んでいるんです。」）- 「Et ensuite?」（「それから、何をしたの?」）- 「Ensuite, j'ai bossé mon français et je suis sorti avec des copains.」（「それからフランス語の勉強をして、友達と遊びに行きました。」）

以上の会話の中では、習慣を表す現在形が知らぬ間に入り込んでいたり、「ou」が「et」になっている。（前回のレッスンで学習した）「ou」が「毎晩同じことをするわけではない」ということを意味するのに対し、「et」は「昨晩したことを正確に覚えている」ということを意味する。

結論：会話の授業では、「言語」を教えるのではなく、「ことば」を教えるのだ。

ルイ・ブノワの諸論文は次のサイトでご覧になれます。
<http://www.ifrance.com/handai/>

イミディアット・アプローチについて、 もっと知りたい方には...

イミディアット・アプローチのホームページ
www.almalang.com



Les ateliers de formation 教師のためのワークショップ

「Conversations dans la classe」研究会は、教師のためのワークショップ（半日から数日まで）を開催しています。ワークショップでは、学習者の立場からイミディアット・アプローチを体験できる模擬授業や、教材の試作などを行い、イミディアット・アプローチについて知るだけでなく体験することができます。

ワークショップやアプローチについての説明会は、出張開催も致します。ご希望の方は、E-mailにてご連絡ください。

(info@almalang.com)

« Conversations dans la classe » 2003 年度版

「基礎」(BASIQUE) 編：
白黒、CD付、全37課・A4 150頁 2400円
「ステップアップ」(AVANCÉE) 編：
白黒、CD付、全42課・A4 170頁 2600円

先生方のためには：

- 教師用指導書
- ニュースレター « Lettre de Conversations dans la classe » (フランス語版・日本語版) 定期発行

販売元：

伸興通商株式会社：	tel	03-3353-1751
	fax	03-3353-2205
欧明社：	tel	03-3262-7276
	fax	03-3230-2517
エスパス・フランス：	tel	06-6534-1002
	fax	

« Conversations dans la classe »は
下記の書店でもお求め頂けます。
東京：欧明社
大阪：エスパス・フランス

その他お問い合わせ：info@almalang.com

オープンクラス・カレンダー： イミディアット・アプローチの授業見学！！

イミディアット・アプローチにご興味のある方、他の先生の授業を見学したいという方のために、授業を公開している先生方がいらっしゃいます。現在、仙台、東京、横浜、静岡、大阪、京都、神戸、松山、福岡のフランス語の先生方が、見学者を受け入れていらっしゃいます。

- イミディアット・アプローチによる授業を見学したい方は、ホームページをご覧ください。見学できる授業のスケジュール表と先生方のご連絡先があります。
- 既にイミディアット・アプローチを実践されている方は、ぜひ見学者の受入れにご協力ください。学習者が色々な人とフランス語で会話をする貴重な機会にもなります。お気軽にご連絡ください。